

# 針葉樹會報

復刊第13号



1966.6

写  
真  
説  
明

エイギュ・ド・ミデイ主稜線を行く

アサヒペンタックス SV・100ミリ、倉知敬撮影

四十の手習い

山田亮三

へエそりかい。ベンちゃんやカンちゃんと一緒に山に行けるのかい。藤島さんなるへソ曲りのジイさんにも逢えるのかい。行きたいな、行きたいな。小学生の遠足のような気分になった。

結局のところ、いまの世の中で、まだはだして野原を走ったり、とんぼ返りができることぐらい、すばらしいことはないではないか。素朴で寛容な大自然のふところに歩みよって、あらためて人間らしさを味わってみるとほど、すばらしいことがあるだろうか。

——  
「わが山々へ」より  
——

しかし考えましたな。事務所のあるビルの三階まであるのにハアハア呼吸をきらす情なさで、一体山に登れるのかな。なるほど藤島さんは七十才、村尾さんは六十二才、望月さんがたしか五十二才だろう。四十六才のオレはだいぶ若い筈だが、しかしあの衆は山登りの名人、達人だ。噂によれば徒党を組んであの山この峰、一年十二ヶ月、一月も欠かさずどこかにお出かけだという。してみると足腰は強いな。七十のジイさんにおいていかれたらみつともないな。

とつおいつ思案していると女房がぬかしおった。

—— やめなさいよ。年甲斐もなく。

山よ、ああ山。穂高の岩場はわが庭のごとしと天狗の鼻をピクつかせたのはすでに四半世紀以前の話。山の廃兵として自他ともに許すこの私に、雪の山のテンマクに寝よといふ。

シラフがないよ 何とか都合します。

アイゼンもそうだよ—— 買つてきてあげます。

なんでもいたれりつくせりのお話であるうえに、この人、ひとを誘惑するコツを心得ておりますな。

「村尾さんと望月さんが行かれます。それに藤島敏男さんも参加される筈です」

発行日  
1966年6月15日  
発行社  
針葉樹会社  
印刷所  
錦光社

針葉樹会報

復刊第13号

編集人  
東京都府中市若松町  
5-6-11  
三井物産寮内  
倉知敬

したが、お天気は頗る良いし、重荷は全部若手先輩諸君がかついでくれるという有難さ。ハアハアポチポチと歩き、もう一步も足がでないぞ。もうオレはダメだゾと思う頃に、どうやらテンマクに辿りつきましたな。

目の前がカクネ里から鹿島の北壁、荒沢の奥壁がチヨッピリ顔をだすという素晴らしく景色のよいところ。あの奥壁の南稜は、日本入で一当り前だがネ毛唐がのぼる筈はない——オレが二番目に登ったんだゾ、といいきかせてみても、どうにも実感は湧きませんな。

はじめて山に連れてきて貰った素人のように五龍をながめ鹿島檜をながめ、いいなあ、いいなあ、いいなあ、とだらしなく感嘆するばかり。

さて明くればまたお天気がよろしい。大遠見をこえ、西遠見をすぎ、白岳の大斜面をナメに登るまではよかったです、さて五龍の本体にかかるバテてきましたな。幸い紅一点の村尾さんのお嬢さん。下りは強いが上りはそれほどでない。(サトコさん、おゆるし下さい)。内職に白百合なる女子大の先生をやっている私としては、若い女性をみせておけません。ということに名をかりて、まあ休みましょう。ゆっくりゆきましょう。一行の

ドン戻となつてよろめきながらハイあがる。

最後の雪の斜面でヒヨイと上をみると、村尾さんと大橋君がニヤニヤ笑っている。思わず声がでましたな。

「ソコがチヨージョーデスカ。ホントニソコガチヨージョーデスカ」

頂上でありました。

ああ、雪をかぶった剣がみえる。一生二度とみることはできまいと思つていた雪の剣が

人がクライマックスでありました。

人のことを書いておきましょう。

藤島、村尾、望月の三名人。全くの名人でいいなあ、いいなあ、とだらしなく感嘆する

小屋への途中での話。村尾さん御持参のピッケルは、虎徹の名刀を思わせるような大業物

何でも近藤先輩がイタリアから贈られた由緒あるしろものとのことだが、何という名のピッケルか、カンちゃんがタメツスガメツしていると"ハイこれでごらん"と村尾さんが取出しましたな、天眼鏡を。ウーム、天眼鏡ねえ。それもリュックのどこをガサゴソさがすわけではない。魔法のようにヒヨイとでてくるタイミングと手際の良さ。名人芸ですな

望月のカンチャン。登りはじめて暫くするとドン戻となつてよろめきながらハイあがる。最後の雪の斜面でヒヨイと上をみると、村尾さんと大橋君がニヤニヤ笑っている。思わず声がでましたな。

## 目 次

次

四十の手習い ..... 山田 亮三

追悼・渡辺九郎氏

九郎の思い出 ..... 吉沢 一郎

冬の岳川谷 ..... 倉 知 敬

懇親スキーリング ..... 宮本 英治

五月の五龍 ..... 中 島 寛

会員消息

新会員紹介

おめでとう

編集後記

× × × × ×

なつかしい数々の思い出！ いま、それらの思い出は、ここにすべて集まっているようだ。過ぎ去ったことも、死んだ人びとの影。老いたる山男の思い出の中によみがえつくるにつれ、すべては、ここに静かに、無言のままに集まり、小屋を満し、とどまるがよい……。

シャルル・ゴス・近藤等訳  
「アルプスに逝ける人々」より

(5) (8) (8) (8) (4) (4) (1)

メシを喰うという。メシというのは昼に喰うものと思うのが素人のあさはかさ。ハラがすこしてもへったと思つたらすかさずつめこんでエネルギーを補給する"分割ヒルメシ"が一番のこと。なるほどお相伴してみると頗る調子がよろしい。教えられましたな。

藤島七十翁。いやおどろきました。そのへソ曲りぶりは息子さんの泰輔さんの書物で承知していたが、イヤハヤこれはホンモノですな。一番の傑作は、五龍のぼりでのアイゼン事件。これは大橋君が感嘆これ久しくしておりましたから、ひとつ当人からきいて下さい。村尾さんの六十二才でさえビックリしているのに、この七十のジイさん、元気なこと元気なこと。終始先頭を歩いて、私などあまり姿かたちをみうけなかつたほどの達人ぶり。勇気がでてきましたな。藤島さんの年まで、オレはあと二十四年もある。だいぶ山に登れるな、まだまだ楽しめるな。

この三名人。頂上には必ずカンビールを御持参になる。それもカンに口をつけてゴクゴクなど不酔なことはなさらぬ。ちゃんとカラスのコップについて召上る。そのコップのいれものが大変で、藤島さんは段ボールのお手製の箱、村尾さんはキンショウバイか何て誰が喜んで登らせてくれますか。要はこ

かの空ビン。その空ビンにピッタリするコップをさがすのに、デパートで一々試めしてみたそりだから、この人も普通ではありますでエネルギーを補給する"分割ヒルメシ"が一番のこと。なるほどお相伴してみると頗る調子がよろしい。教えられましたな。

若年の先輩諸君。強いねエ。頼もしいねエ。山本君や大橋君は、もう学校をでてから十年近くなるだろう。サラリーマンの乏しい余暇をフルに活用して精進、努力、体力的にも技術的にも、現役の諸君以上ではないかな。

中島君以下の若年の諸君が、これまたかづぐは、登るは、大変なものですね。中島君など五龍をこえ、キレットをこえ、鹿島槍まで往復してきたのだから、驚きあきれるほかはない次第。針葉樹会の若手の諸君

とにかく決心いたしました、四十の手習いを。おいおい身体をならして、岩登りもやりますか。スズメ百まで踊りを忘れず。幸い名古屋在住の大橋君が、御在所の岩場を案内してくれるという。大橋君、忘れないで下さい。

そう決心したら何となく世の中が明るくなつてきましたな。三名人をはじめ、山本君、大橋君、中島君、そのほかの諸君に、心から御礼申上げるとともに、今後ともよろしく御願いする次第である。



### ◇お知らせ◇

今度、幹事の方で予定しております山行予定は次の通りです。詳細は追而通知。

七月下旬・週末三日位で東北の山。

九月十五・十八日・老人の日(十五日)と日曜(十八日)を利用して、南アルプス・

北岳。

申込・問合せは山行担当幹事・小島和人迄(富士通信機、システム部、二二六一三二一一)

## 追悼 渡辺九郎氏

会員、渡辺九郎氏は昭和四一年四月十三日  
心臓衰弱のため逝去せられました。

葬儀告別式は四月十九日、浅草清光寺にて  
行なわれ、本会よりは幹事長 中村正司が出  
席致しました。

(幹事・高橋記)

九郎の方が私より一つか二つか若いはずだ  
が、彼の方が先へ逝ってしまった。惜しいと  
か何とかいうのはありきたりの挨拶だが、こ  
れからという時に死んだので、その点ではわ  
れわれよりも本人の方が惜しいと思っていた  
だろう。

一 彼はその名の通り、後半は随分苦労した。  
順調にいけば今頃は三菱銀行の重役陣には加  
わっていたろうが、人間の弱さが自らその方  
向を変えてしまった。重役や社長になるのが  
何もわれわれの最終の目標ではないと思うが  
そういうのになるのを目的にしたって別に悪  
いことはない。その意味では彼も気の毒な人  
間であった。

## 九郎の思い出

吉沢一郎

う一人は矢作太郎である。これも四年から入  
って来たので私よりは年下だった。そして九  
郎よりもずっと早くあの世へ行ってしまった  
いる。あわて者は電通の吉田秀雄ばかりでは  
ない。まあ結局は、外見は強くても氣の弱い  
のが先へ行くことになっているのだろう。  
私などはどうつかずなものだから、どっち  
つかずにそれとなく生きている。

彼との山行については今となつては覚えて  
いない。年をとるに従つて人間は忘れっぽく  
なるものだといわれているが、私もその例に  
洩れず、何処かへ一緒にいったことはあると  
思うが殆んど忘れてしまった。唯、大井川の  
上流の小西俣で遭難しかかったのだけは覚え  
ている。

前のことかと覚えていたが、人間の記憶の怪  
し気なことはあれをみてもわかるが、私が読  
むとあの記事は間違いである。もう一人の証  
人がもういないのだから、今更何をいっても  
大人気ないし、つまらない、どっちでもいい  
ようなことなので、ここにはとり上げないこ  
とにする。

九郎のことについて五枚書けといわれたが  
一番はっきりしたことを書いてしまうと、も  
う筆が進まなくなってしまう。今更「針葉樹」  
のバックナンバーを克銘に調べて書いている  
ヒマもないのに困るのだが、そうだ「針葉樹」  
といえば、贈写版で刷った第一号に、彼の撮  
った写真がプリントのままで載っていたはず  
だと思い、その合本を出してみた。やはり

ところでの小西俣事件の時は三人で、も

三枚あつた。二つは三峰川と高山（両方とも南アルプス）他は釜沢俯瞰それである。釜沢

はベンちゃんと九郎と私の三人で行つたようだ。大正十四年の十月二十一日か、十一月一のことである。

この間、日本山岳会の曾原喜久蔵が交通事故で死んだという知らせをカンちゃんからうけたので、早速、藤島敏男氏に追悼文を頼んだ。ここへ何故曾原氏をもち出したかといふ

と、氏は大正七年の高商卒で、一橋山岳部ができる前の山の先輩であるからであるし、もう一つは前記の釜沢遍行（藤島氏は大正十三年といつてゐる。どちらでもよいが、）をした時に、甲武信の頂上で、藤島、曾原、戸沢岡山の四氏に偶然あつたことがあるからである。一橋の先輩の中にも中村清太郎さんや賀正太郎さんのような、日本山岳界の第一人者が何人かはいるが、曾原さんも古い点ではその中に加えていい人だろう。

九郎の告別式のときに、私の座つていた前に「三共」の宣伝課長をしている渡辺さんがいた。電通にいる時に時々お世話になつた人だが、その日まで九郎の甥だとは知らなかつた。先方もまさか私がその伯父さんなる九郎と同級生で、山登りの仲間だったとは知らな

かったようだ。いつもいわれることだが世間は狭い。

予科時代に九郎の家に遊びにいって、そのバカでかい豪壮さにびっくりしたことがある。渡辺銀行といえばその昔を知つてゐる人なら知つてゐる東京でも大きな銀行であった。

だがいくら大きても、それより大きな波が来ればかぶさってしまう。

家庭内部のことは知らないが、九郎はクロー

しながら死んでいった。然し、彼にも黄金時代はあった。だからプラス、マイナス、ゼロかも知れない。だがマイナスだけで墓入りする人も多いのだ。その意味では彼にも多少の生甲斐はあつたろう。

以つて瞑すべきか。

\* \* \* \*

### ◇お知らせ◇

去る六月六日の評議員会で内定した今年度幹事は次の通りです。カッコ内は担当。

岡垣 治男 (幹事長)	昭33年卒
中島 寛 (総務)	昭36年卒
山本 尚禎 (会計)	昭36年卒
小島 和人 (山行計画)	昭40年卒

倉 知 敬 (会報発行)

昭38年卒

◇会員消息◇  
今年三月めでたく母校を卒業し、新しく会員の仲間入りをしたのは、次の八君であります。

卒業するには大分苦労したようですが、みんな出てしまえば、おさまる所におさまつてそれぞれ分相応に、忠実に社業にいそしんでいるもようです。カッコの中は就職先。

※

佐藤之敏君（三井信託銀行・丸ノ内支店）

山本溢弘君（住友セメント・四倉工場）

池知昭洋君（日立金属工業・安芸工場）

石田信隆君（三・菱銀行・大阪支店）

高崎俊平君（日産自動車・厚木工場）

佐藤久尚君（日本輸出入銀行本店）

原 博貞君（日産自動車・新子安工場）

平川紀男君（富士写真フィルム足柄工場）

アンナブルナ、僕らがピタ一文の報酬がなくとも行なつたであろうアンナブルナこそ、僕らが生涯の残りをこれによつて生きる宝なのだ。この実現によつて、一ページがめくられ……新しい生活がはじまる。人間の生活には他のアンナブルナがある。モーリス・エルゾーク・近藤等訳  
「処女峰アンナブルナ」より

## 冬の岳川谷

166年1月〇B合宿

倉知敬

ようすを見に岳沢ヒュッテまで登ることに

して暗い内に出掛ける。思ったより多くの

参加

大橋喜治 中島寛 中川滋夫

倉知敬 高橋信成 小島和人

中村雅明 金成剛

パーティが入っており、トレイスの横にテ

ントが途中十幾つも張つてある。テントの

なくなるあたりからラッセルが始まつたが

兩君) が一緒に行くといい出したので、期せずして、とにかく今年は〇B、現役合同合宿になつた訳である。

なんとかして学生達と一緒に合宿をやろうという試みは、今年もとうとううまくいかなかつた。去年は、槍の北鎌尾根を同じベースキャンプから登つたものの、時期が全くずれてしまつて同じ所を別々にそれぞれの流儀で登る、という結果になつた。それはそれで良い所もあるのだが、お互の発展のために、何らかの形で一緒にやるのが望ましい。

今度は、学生サンは穂高一槍の縦走と、笠ヶ岳一硫黄岳の縦走をやるというので、先のパーティの連中が下りて来た所で上高地で会い、一緒に岳川谷へ入ろうという計画を立てた。ところが連中は、意外に早く縦走を終えてしまい、上高地にテントだけ残して早々と帰つて来てしまつた。一度帰つて来たら誰も又直ぐに出掛ける気も起さない。

ところが、何かのつごうで、その合宿に参加出来なかつた二年生の二人(中村、金成の

冬の岳川谷(聞くところによると「岳沢」)という名は俗名で、岳川谷はそんな軽薄な「沢」でない、という)は、今時あまりパツトした存在でなくあまり返り見られることがないようだが、それだけに手軽な地味な所があつて、初めて入つた冬の岳川谷は仲々よい山だつた。

暮の三十日夜、例年の通り「帰郷バス」の松本行きに乗つて出発、偶然、白馬ヘスキ

にいくという三井や長沢と同じバスに乗合せて、両方仲よく松本までやってきた。バスは

沢渡までで、それからマイクロバスで坂巻近くまで楽をして、もう人の足でしか歩けない所からしぶしぶ歩き出す。折悪しくそのあと三日も降り続いた雪が、その時もやけに強く吹きつけて、何とも気分よろしくない入山だけ。何も見えない中を、ゆっくり歩き、午後二時頃には小梨平に張つてあるテントにた

寒いし、ぬれるし、仕方なくすぐ下り始める小屋で一服したあと、サッサと上高地まで下つた。

テントを上まであげるのも面倒だし、その翌日も一応のアタック体制をして暗い内に出発、小雪の中を二時間程モクモク登り明るくなる頃今度はダイレクトに小屋へ着く。時々空も明るくなり、風はなく雪も小降り、いけばいけるチ、と話し合つていたが、結局、コブ尾根へいくつもりの大橋、中島、高橋パーティだけ行く気を起こして

出かけた。他はやる気せず、明日の好天を期待して御苦労にも又上高地へ下る。

コブ屋根パーティはコブ沢の右端伝いに深い雪の中を登るが、先行パーティあってそれすぐ追いついてしまう。沢の上部は雪崩が恐いので右岸のブッシュ伝いに、苦労して稜線まで攀じ、相変らず深い軟雪に悩まされながら稜線を行く。何しろ軟い不安定な雪なので、全部かきおとして下のホールドを出してから一步進むという具合なので、進行がはからだらないのもおびただしい。入れかわり立ちかわりラッセルするも思うように前へ進まずコブの登りにかかる所でとうとう日が暮れビヴァークと相なった。

先行の志峰会パーティとならんで岩棚に腰かけ、彼等からラジウスをかりて暖まつたり夜明けの寒さこそつらかったが、そう消耗することなく一夜をすごした。

一方、上高地へ戻った四人、待てど暮せど誰も戻らない。いろいろ臆測して出た結論は天狗のコルのヒナン小屋か、雪崩の下か、といふ所。それでは仕方ない、天狗のコルとコブ尾根の間のタタミ岩尾根へ登ってようすを見る以外とる手はない、こう決めてその夜は

眠った。

夜半から気温下り、空気が張りつめてくるような感じで、三時頃起きて見ると星がきらめく快晴である。風邪気味の金成はテントに残し、中川、倉知、中村の三人は四時、テントを出発。友の安否を気付かう不安と、唯一のチャンスが失なわれ行くむなしさに心も重く、通いなれた岳川街道を行くと、岳は見る見るモルゲンロートに燃えて、きらびやかに姿を現わす。新雪におおわれた岳川谷は、その最高の美しさを我々に見せてくれた。

コブ尾根の末端に来たところで大声でコールをかけれども何も返ってこない。小屋から回り込んでコブ沢に出ると、デブリの群。小さなものだから大したことはないのだが不安はつづる。タタミ岩尾根へは、右の支稜から取付き急な斜面をハイ松の枝を堀り出し、それを頼りに行く。上に登ってやっと陽だまりに出た所でゆっくりしていると、右手上方のコブ第一峰の上に人影が見える。大声でコール。誰の声か聞きわけられる程のはっきりした返事／何のことはない。

それからはお互に見え隠れしながら快晴の中、ゆかいに登る。だが、雪はどうも深くラッセルは楽でない。技術的にどう困

難というところはないのだが、馬力を出さねば登れない。

タタミ岩尾根では、つめ近く左側をまいていると、足元から「バカッ」と、本当にそんな大きな音をたてて厚い五〇センチ位の雪板雪崩、キモを冷す。幸い事故はなく、その後は忠実に岩稜を伝る。意外に上部は手強い所もあり最後の岩場を登り切った時には、もう暗くなっていた。

主稜線に出て、天狗のコルへ向うも、暗がりに消えそうなライトで、道も定かにわからぬ。その内コブ尾根組も追いついてきて、一緒に何とか天狗のコルへ下った。

沢に下りれば、あとは早い。月で白々と輝く上高地に戻ったのは午後の九時。ともあれ結構なアルバイトであった。

翌四日は又シンシンと雪の降る日。中村と金成の二人の学生を残し、勤めある身はあわただしく帰らねばならない。疲れ残る身体を急がせて、からくも沢渡で一時半だがのバスに間に合い、その日の内に帰京することが出来た。

今年の冬山は、去年のと比べて、なんとな

く寂しいものだった。天気のせいもあろうがどうも楽しさがちがうようだ。去年書いた北

してみると、同じこう書いている今の気分の一年前と何とちがうことよ。来年は又どんな具合になるだろう。一年々歳はとっても気分新たに山に向いたいものだが、現実はいつもいつも限界をより強く感じるばかり、ここで一つ、パツと気分を一新させることをやりとげてみたいものと痛感する次第。

五月の五龍

中島 寅

北は新潟から南は大阪までの面々、古くは昭三卒の村尾さん、あるいは望月さん、山田

茂充（生）  
佐藤之敏  
佐藤久尚  
俵昭（学）

懇親又辛苦，石打

宮本英治

二月十一日  
参加 久保孝一郎 林 正敏 吉田義則  
高崎 治郎 宮本英治 長沢道彦  
高橋 信成 多田伸治

ントの中でも同じ釜の飯を食い、一緒になつて五月の雪山に登つたなんてのは、針葉樹会の長い歴史の中でも、はじめての出来事ではなかろうか。

五月一日 晴

天気に恵まれなかつたとはいえ、無事、全員登頂を果し、今年の五月の五龍岳合宿は、

O・Bになつて山に来る度に不思議に思うのだが、都会にいたら、しょつ中スレ違つてばかりいる連中が、山に来るとなると、まず間違いなく決つた場所に決つた時間通りやつてくる。

十一日午後上野を発ち、六日市は大和旅館なる所へ腰を落ちつける。なぜ六日市のこの旅館に泊ることになつたか、何しろ幹事の奥野、渡辺両氏がこないので、さっぱりわからなかつたが、とにかく、翌日は石打へ行くことにして一夜談笑。特に昔の学校の話などが盛んで、誠に清い一夜でありました。

明けて十二日、快晴の中を石打、丸山スキーフィールドでスキー場ですべる。久保、林の両先輩、体を振つてヒョウヒョウとすべるその勇姿は、誠にりっぱ、流石に年期が入つていると違うものと痛感致した次第。

期間 五月一日～五月五日

何年ぶりかで神城の又寛さんの家に顔を出すと、新潟からやつてきた山元さんがいる。卒業以来六年ぶりの出会い、名古屋のプレーさん（大橋さん）も得意のアタック・ザック姿で現われた。アタックと準備を整えて長沢の車で出発した先発の小島と長沢も無事着いたらしい。大阪からきた三森と一緒に上に登ったという。学生の管理が悪く、上高地におきつ放しになつていたテントを御苦労にもとり

今回は人数少ないせいもあって、小じんまツアーリーをするようになら、もっとよかつた  
りとまとまり、仲々ゆかいなスキー行でした。と思ひます。

\* \* \* \*

にいっててくれた僕も、ちゃんと馳せ参じてくれた。頼まれた原稿をほっぽり出して十何年ぶりの雪山に禁酒までした山田さんは、大町の別荘から車でピタリ時間通りにかけつけた。又寛さんの家は、いわば戦前望月さんや小谷部さん時代からの根城。望月さんは、なつかしそうに小谷部さんの話などに花を咲かせていたが、先もあることとて、食事を済ませると早々に出発した。

藤島さんを先頭とする『長老組』は身も軽く遠見尾根の夏道を、山本さんを頭とする『ボッカ組』はキスリングの重荷にあえぎながら冬道をいく。最初に急な登りのある遠見尾根だから、いくら荷物があつても時間をかせげる冬道組の方が早いだろうとタカをくくっていたら、われわれが遠見小屋に着いたときには、長老組はすでにパイプの煙をふかしていて「ガンバレッ、もう少しだ！」と逆にネジをまかれる仕末。

ギラギラ輝く太陽がまぶしく、五月の雪山は実にのどかだ。北城平野の真中をゆっくりとマッチ箱のような汽車が通りすぎていった。小屋で昼食の後一二時四〇分出発。

いつも先頭を歩くのは藤島さんか望月さんその次が山田さん。実際に早い、そしてほとん

ど休まずにじっくりと歩き続ける。そのかわり、景色のよいところへ出ると、思いきり腰をおしつけてザックを広げる。それこそ山を楽しんでいる歩き方だ。合宿で、「何ピッチ」という言葉があるように、一定時間歩いては一定時間休み、『景色なんぞは夢のうち』と

いう歩き方をしてきた僕には、そんな気ままな歩き方がとてもうらやましく思えた。

途中、先発の長沢、小島、三森がサポートを下りてきてくれた。長沢はスキーをはいて快調に滑り下りていった。

テントは中遠見の景色のよい台地の上に張られていた。カクネ里が真正面に見える。もう二張増して、われわれのベース・キャンプができあがる。すばらしい夕焼けを、皆、ガタガタ震えながら最後まで眺めていた。

神城（八：五〇）—遠見小屋—一二：三〇（一一：五〇）—中遠見テント地（一五：〇）

一、五龍岳 頂上往復 村尾、望月、山田、山本、大橋、山元、長沢、藤島、村尾（智）  
二、五龍岳—鹿島槍往復 中島、三森  
三、G<sub>2</sub> 中央稜登攀 小島、佐藤久、俵  
中島と三森は、G<sub>2</sub>バーティとともに五時テントを出る。天気図からも午後には天気が崩れことが予想されたが、うまくいけば鹿島槍までいけるだろう。最悪の場合でもキレット小屋までいって、次回北壁アタック隊のための偵察をしてこようというつもりだった。雪が少なく、五龍小屋でアイゼンを外す。五龍岳からみる鹿島槍は実に遠かつたが、やはりなかなか魅力的だ。夏道とほとんど変わらない道をどんどんとばす。右手の剣が黒々とした岩を浮き出させ、かえって偉圧するような重量感がある。

途中三森が足の痛みを訴え、キレット小屋で休ませ、中島一人が鹿島槍に向う。心配したキレットは、左側の雪と岩のコンタクトランインを、固定ザイルを使って難なく通過する。雨模様で、何度も引返そうかどうか迷いながら、危険はないし身体の調子もいいのだから、行けるだけは行こうと考えていた

ら、とうとう北槍の頂上まで行き着いてしまった。しかし、ガスの中で何も見えず、ただわけもなくのどが乾いた。

当初は、次回北壁アタック隊の帰路を偵察するため、キレット沢を下ってみようと考えていたが、ガスで視界がきかないことと三森の足の故障のため、往路をひきかえことにした。長い長い道程だった。天候はますます悪くなり、風がうなりをあげて頭上を吹き抜けていく。雨が冷たかった。

前線の通過のためか南東の突風が吹き荒れて、五龍頂上からの下りでは、今にも飛ばされそうになりながら這って下りた。

テントに着いたのは午後六時、倉知たちも上ってきており、暖いミルクが待っていた。テント（五：〇〇）一五龍岳頂上（八：二〇一八：四〇）一キレット小屋（一一：四〇〇）一テント（一八：〇〇）

G<sub>2</sub> 登攀隊も雨にやられ散々な目にあったようだが、無事午後二時頃には帰つて来ていた。下の取付のカペには相当消耗したがあとは大したことはなかつたとのこと。

五月三日 曇のち吹雪

テントの中での最大の楽しみは食べもの、

停滯、シビレをきらせて、長沢、小島、三

飲みもの類。村尾さん差入れの角ビンはまたたく間に雲散霧消（？）し、山田さんがわざわざ大町で仕入れてくれた肉の塊がランメンの中にボンボンぶちこまれる。

今年社会人入りした連中は食いものにウルサイのが揃っているということで大いに期待していたが、材料が悪いのか腕が悪いのか、あまりバッとなかった。やはり山では質より量がモノをいうようだ。

それにしても長老組の小食なこと。大食いの誰かさんが一人で食べる分を五人で分けて、永らえるというのもナル程とうなづける。

昨日の荒天はますます募るばかりで、今日は停滯、雲の切れ間を見つけて、村尾、望月山田、山本、大橋、山元、藤島、村尾（智）の八名は名残り惜しそうに下山した。

後からきけば、この夜全員大町の山田別邸におしかけて大酒宴を催したとのこと。

その翌日、まだまだこりずに藤島、望月、山元の三名は信濃森上から柳沢峠をこえて長野へ出る第二の旅に出たということを聞いた。

見習うべきことである。

森、佐藤之、佐藤久が吹雪をついて下山した。眼やかだつたこの中遠見の台地も今はテントを滑り落ちる雪の音だけ。

五月五日 快晴

すばらしい天気になった。真っ白に雪の鎧をつけた鹿島の北壁は息をのむ程の美しさだ。倉知と二人、どこかバリュエーション・ルートを狙おうと思案したが、雪崩のことなど考えてどうしてもとりつく気にはならなかつた。

それでも様相を一変した白の世界は魅惑的で、倉知と二人、再び五龍岳頂上に向つた。

雨の後の二日間の吹雪で積雪は二〇釐程だったが、かなり硬い氷が発達して、ところどころステップ・カットティングをしなければならなかつた。思わぬ楽しいトレーニングといふことになつた。

テント（五：〇〇）一五龍岳頂上（七：五〇一八：一〇）一テント（九：四〇）

食糧のある限り、テントの中で山を眺め詩をつくつて過したという僕をおいて、下山した。編者注 その後、学生二名（齊藤、宮武）が入山し、僕と共に五龍・北尾根を登り、掉尾をかざりました。

## 学生山行記録

66年1月より5月まで

チーフ  
リーダー 岡田 健志

### ①北八ヶ岳スキーコース宿・岡田(三)、宮武(一)

一月七日—一日、茅野—渋湯—黒百合ヒュッテ—緑池—稻子湯—松原湖

本来なら全員参加するべきなのに、参加はたつたの二人。割り切れない気持。

登山者にも殆どあわず、静かな山行だった。

### ②八ヶ岳・加藤(二)、俵(一)

一月一五日—一六日、茅野—行者小屋  
行者小屋より阿弥陀往復。後、横岳から

硫黄に縦走、赤岳鉱泉へ下る。

中島OBと出会い、殆ど一緒に行動する。  
先輩の一舉一動に大いに学び、うまいものをお食わしてもらって、有難い山行だった。

### ④南アルプス・早川尾根・岡田以下八人参加

四月二九日—五月四日、芦安—夜又神峰—  
薬師—駒—北沢峠—戸沢

### ⑤白馬岳・中村(三)、金成(三)、賀川(一)

五月二五日—二八日

猿倉にテントを張って、杓子尾根、小連華尾根を試登。

### ⑥谷川岳雪上訓練合宿・岡田以下十四名参加

五月二八日—三一日

一日目はマチガ沢で、二日目は芝倉沢で練習。高崎・原の両OBが参加。三日目雨で沈没。三日は岡田一人のこり、マチガ沢をつめる。

この十三号は前号が十二月に出たあと、本年(一九六六)一月より六月までの分に当たりますが、山行記録など沢山あって大分省略しなければなりませんでした。しかし、今後原則として会員の山行スキーリングはすべてのせるという方針で行きたいと思いますので、お出かけの節は、ハガキで結構ですから、何処へ誰と行って、どうだった位簡単に御報告頂ければ幸いです。

次号十四号は八月刊、夏山特集ということになります。七月どこかへお行きになつたら早速原稿をお願いします。

一九六六年六月五日

倉知敬

### ③春合宿・三伏峠より北岳縦走

岡田以下八名参加

三月六日—二三日

雪は少なかつたが、どこもクラスとしていて、行動は慎重にしなければならなかつた。フィックスザイルをふんだんに張つた。それでもとうとう八本歯の稜線で

本年一月から五月の間に、次の三氏の方々  
がめでたくゴールインしました。

×おめでとうございます。  
×四月一日 沢木一夫氏(昭三四年卒)  
×四月一七日 朝木大統氏(昭三七年卒)  
×五月一九日 中川滋夫氏(昭三六年卒)  
×

## 編集後記

二年生の加藤が大カンバ沢側へ四〇米転落、足首を折った。それからの行動は難波をきわめ、おまけに野呂川林道も途中で崩壊していく大まわり、やっと奈良田経由、下山した。

